報告

大分県庄内地方の庚申信仰について

岡部　富久市

一、庄内地方の庚申信仰の現況について

庚申信仰とは、「六十年あるいは六十日毎にめぐりくる庚申（カノエサル）の時に、特殊な禁忌を要求する信仰」である、とされる。(1)

この信仰に関する我国での受容と発展についてはすでに別稿でのべた。(2)

そこで、本稿では庄内地方におけるこの信仰の現況と、いくつかの特色について略述することにする。

調査地域は庄内東部の榛木、長宝、小挟間から阿蘇野に至る庄内町全域に(3)及んでおり、調査の結果から、各所で「庚申さま」の行事が依然として継続されていることが確認された反面、近年に至ってこれを中止したところが多数あることも明らかになった。

以下、いくつかの事例の中からこの地方の「庚申さま」の概要を瞥見することとしたい。

(1) 庄内町中渕の例

「庚申さま」は六一日毎にやってくる庚申（カノエサル）の夜に行なわれるが、暦上庚申（カノエサル）がない月は、特に申（サル）のつく日（これを小ザルと呼ぶ）を選び庚申（カノエサル）の時と同様のまつりを行なう。

従って中渕のこの例では、まつりは毎月一回は必ず行なわれることになる。

事実、戦前は勿論のこと戦中も一貫してこのやり方は絶えることはなかったが、最近になって一月から十二月までのうち、六月、七月、十月の三月は「庚申さま」は行なわれていない。

六月と十月は農繁期が考慮されているためであり、七月は講中が九戸に減ったためである。

従って、現在「庚申さま」は一月、二月、三月、四月、五月、八月、九月、十一月、十二月の九回となり、それぞれ九戸の講中が輪番制で座元をつとめながら運営している。

それにしても、毎月「庚申さま」を行なう事例は珍しいものといえる。（この他にも、庄内町奈良田では、かつて十二軒の講中で毎月やっていたというが詳細は不明である。）

ところで、「庚申さま」の日は夕方になると、前回の座元から、本尊の猿田彦大神の画像を描いた掛軸が当番の座元に届けられる。（写真1参照）

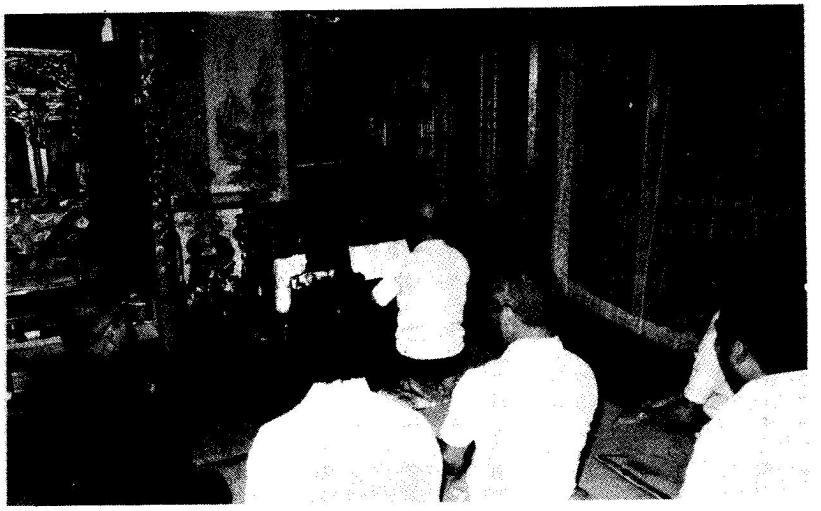
座元にあたった家ではこれを床の間に掛け、祭場を設け、神前に料理と御神酒一升を供える。

この時供えられる料理は、アゲ、マメ、吸物、スアエ、野菜などに御飯である。しかし、御飯以外は季節によって一定ではない。

午後七時頃になると、講中の参加者がぽつぽつ座元の家へ集ってくる。参加者は先ず床の間の猿田彦大神に向って柏手二回の後礼拝し、座元の戸主に向い「今晩は庚申さまでおごとでございます。」と挨拶をのべる。

やがて、全員参集したところで座元は神職に対して「お供えができましたのでお願いします。」というと、神職は神前に進み出る。

〔写真1〕 座元の角熊倉喜氏は前回の座元から「庚申さま」の掛軸を受けとる。（1978.9.19大分郡庄内町中渕「小申のまつり」）



〔写真２〕　猿田彦神の掛軸の前で講中による厳粛な儀式が行なわれる。（1978.9.19大分郡庄内町中渕「小申のまつり」）

参加者は威儀を正して着座し、神職に合わせて神前に柏手二回の後、礼拝して儀式に入る。

神職は祝詞（大祓）を奏上し、講中の息災と農作物の豊饒を祈念する。（写真２参照）

祝詞が終ると一同柏手を二回打ち礼拝し神事は終了する。

以上のように神事は至って簡単である。

神事が終ると参加者全員による直会になり、神前に供えられたものと同一内容の料理を肴に御神酒をいただき和気あいあいのうちにまつりを楽しみ、歓談に時を過す。話題は村の出来ごと、頼母子のこと、農業関係のことなど全く豊富である。

まつりが終るのは通常午後十時頃を過ぎる。

庚申の神（猿田彦大神）は作の神、導きの神[(4)]と理解されている。

また、この地方では他の地方と同様、泊庚申（十二月）、初庚申（一月）は縁起がよい、とされ、特別に両庚申の時には甘いもの（通常はぜんざい）が参加者に供される。

次年度の座元の輪番は十二月の泊庚申の時にクジで決定する。

ちなみに中渕の昭和五十二年の輪番は次の通りであった。

昭和五十二年度庚申祭典順位

一月　角熊倉喜
二月　麻生政喜
三月　麻生学
四月　釘宮楢美
五月　麻生務
八月　渕茂喜
九月　麻生嘉晃
十一月　麻生稔伸
十二月　野尻善一

（談話者　角倉倉喜氏（農業）大正五年二月十四日生）

(2)　庄内町竜原　袋の例

古くから継続されてきた「庚申さま」も最近になって中止された。

かって袋には十戸の農家があり、そのうち七戸が「庚申さま」を輪番で行なっていた。

しかし、その後、転出する者があって「庚申さま」が中止される直前は、わずか三戸を残すだけであった。

勿論、まつりは庚申（カノエサル）の日には必ず行なわれていたが、いつの頃からか、正月、五月、九月の庚申（カノエサル）の日に限られるようになった。

「庚申さま」が行なわれていた頃は、三戸の戸主が夕食後、座前の家に集まり山伏を招き神事を営み、息災を祈っていた。

そして、その後の直会では米の粉や小麦で作った庚申団子を食べたり、季節の野菜を肴に一ぱいやりながら時を過すのが常であった。

ところで、この袋では、昔は六十一年毎に「庚申さま」の待上げを盛大に行ない、この時には六十一個の自然石を庚申供養塔として杉、松、楮（クヌギ）、楢（タブ）の根元に立て一つの区切りとした。

このようにして作られた庚申塔の群れが現在、袋には六か所あり、それぞれ、松庚申（三か所）、杉庚申、楮（クヌギ）庚申、楢（タブ）庚申として残されている。（談話者　大塚楢十郎氏（農業）明治三十一年九月十五日生）

(3)　庄内町大字東長宝蛇口の例

太平洋戦争直前まで行なわれていたが、現在は中止されている。

蛇口は四つの組に分かれていたが、その四つがそれぞれ二組が一組となって、計二組で「庚申さま」を行なっていた。

一組の構成は約二十七戸から三十戸で、六十一日毎の庚申（カノエサル）の日に輪番で座前をつとめながら運営した。

「庚申さま」の夜には、猿田彦大神の掛軸を床の間にかけ、篠原の慈光寺（禅宗）から僧侶を招き神前で読経してもらった。

このあと参加者全員による直会となったが直会には酒と、一人あたり一丁の豆腐が出され他に料理はなかった。

豆腐代はその場で徴収し（戦前は五銭）酒代は要した金額を全員で割勘とした。

時間は午後七時頃から始められ夜半には終った。

庚申の神の性格ははっきりしない。

（談話者　三重野勇三氏（農業）明治四十三年一月十五日生）

(4) 庄内町橋爪

「庚申さま」は昔から行なわれていたが戦争中に中止された。

中止されるまでは、約十戸が輪番で座前となり運営した。

当日は夕食が終ると各戸の戸主は座前の家に集まり「庚申さま」の掛軸を床の間にかけおまつりをした。

神前に全員で心経をあげ、そのあと直会。

直会には煮〆（大根、昆布、レンコン、ニンジンなど季節のもの）と酒が出された。

掛軸は猿田彦神ではなく、僧形の天照大神と左下に春日大神、右下に八幡大神が描かれたものを使用した。

庚申の神は作の神と理解されていた。

（談話者　田北ツユ子氏（農業）明治四十四年六月十八日生）

以上四つの事例のうち、中渕のものは現在でも依然として継続されている典型的な事例であり、他の三つはすでに中止されてしまった事例である。

これらの事例から明らかなように、庄内町に於ては「庚申さま」を存続させている地域とすでに止めてしまった地域とがある。

例えば庄内町大龍西鶴、庄内町八久保、庄内町奈良田などは最近になって中止した地域である。

またこれとは別に、かっては「庚申さま」の行事が行なわ

れていたことは確実であるにも拘らず、現在は全くその痕跡を残していないところがある。

例えば、庄内町阿蘇野宮下などはこの典型的な例である。

現在、阿蘇野宮下には「庚申塔」と呼ばれる地名が残されているうえ、調査の結果、いくつかの自然石塔が確認されるなどかっては庚申まつりが行なわれていたことは間違いないと思われる材料があるにもかかわらず、地元の人々によって「庚申さま」のまつりは勿論のことこれに関連する行事や記憶は全く残されていない。(5)

いずれにしても、事例調査の結果庄内地方全域についていえることは、この信仰が年を追うと共に人々の心から忘れ去られつつある、ということである。

二、庄内地方の庚申塔の造塔状況について

一般に庚申塔が造立されるのは、庚申の講の組織が成立したとき、または待を何年も続けてその目的をとげた時などである。(6)

調査した限りでは、この地方に関しては庚申塔の基数は多いとはいえない。（別表1参照）

〔写真3〕

庄内町中渕庄屋跡にあり、顔の造りが大造りで大変明るい表情をしている。口もとはやゝ左上りで微笑をうかべ童顔である。塔下部に二猿（みざる・きかざる）と二羽の鶏をもち左手にはショケラを下げている。文久元酉十月五日（一八六一）の刻銘がある。

〔写真4〕
庄内町中洲天満社入口にある。造立年代の刻銘はないが、中央部に猿田彦大神と陰刻文字があり、立派な自然石塔である。高さ八七cm。

しかし、造塔の多寡でもってのみ庚申信仰の情熱の高低を推測するのは誤りであることは他の論稿で指摘したとおりである。(7)

むしろ、庄内町袋の、六十一年毎の待上げの時に六十一基の自然石を立て庚申供養を行なった事例のように、多量の自然石の調製とその運搬、造立作業等にみられるひたむきな信仰心はこの地方の庚申信仰の底流をなすものとして高く評価される。

ところで、別表1から明らかなように、現存する石塔十七体のうち、最も多いのは青面金剛像（写真3参照）で十二体を占める。あとは自然石に猿田彦大神と文字を陰刻したもの（写真4参照）二体と、尊像も文字も刻まれていない自然石塔三体となっている。

別　表　1

主尊 ＼ 形態	青面金剛像	猿田彦大神（陰刻文字）	尊像・文字なし	合計
板状船型	12			12
自然石型		2	3 4か所	5 4か所
合計	12	2	3 4か所	17 4か所

袋の自然石塔群は、六十一年毎の待上げの時に六十一個の自然石を立て庚申供養を行なう方式をとっており、他の地方ではあまり見られない形式であり、特別の地位を占めるものとして注目される。

今回の調査で確認されたものは六か所のうち松庚申二か所（写真5・6参照）と杉庚申一か所、椨（タブ）庚申一か所である。

松庚申では、そのうちの一つで雷によって焼けくずれた松の根元に自然石の庚申塔三十五体が確認された。（写真5参照）

他の一つは松くい虫の被害が著しく、おそらく地上から姿を消すのもそう遠いものではなかろうと思われるが、この老松の根元にも自然石塔数体を確認することができた。（写真6参照）

また、杉庚申は最近農道や林道を開通させる時にブルドーザーによってとり除かれ、現在では大杉のあったあたりを知るのみである。

〔写真5〕

庄内町袋にある松庚申。中央に見えるのが松の巨木。六一年毎の待上の時に六一個の自然石を立てたという。根元の草むらの中に土や草をかぶって自然石塔が散在している。

〔写真6〕
庄内町袋の松庚申。松は松くい虫によって無惨な姿となっている。自然石塔はほとんどが土中に埋っている。

さらに楠庚申に至っては、それを偲ぶことのできるものとしては何一つなく、強いて求めれば、楠(クス)の木のあったあたりに生い茂った木立ちと古老の記憶の中に残された次のようなエピソードだけである。

そのエピソードというのは大塚楢十郎氏（前出）のお話によると、

昔、庚申塔の中心にあった楠(クス)の木を谷村の某が買い取って、それを切出している最中、神の怒りにふれたのか、突然激しい腰痛に襲われた。驚いた谷村の某はノコギリを楠の木にさし入れたまま一目散に逃げ帰ってしまった、という。

ところで、青面金剛像はそのほとんどが板状船型で、材質は刻むのに容易な凝灰岩を用いているので、風化による破損が著しいものが多い。

塔の高さは概して五十センチ前後のものが多く、中洲正徳寺境内にある青面金剛像はこの地方では比較的大きい部類に属するものである。

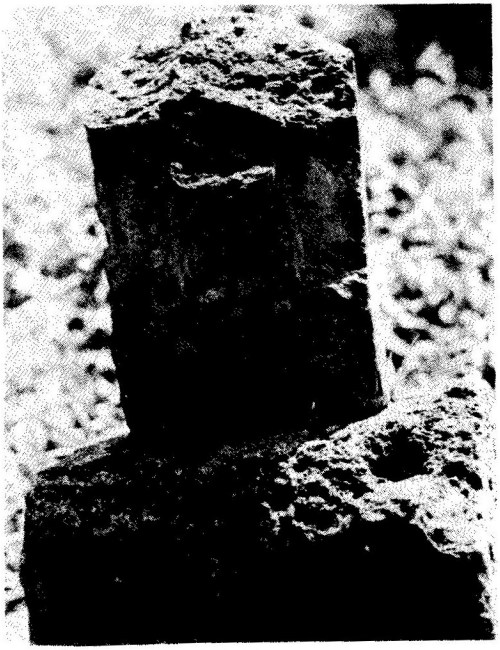
次に刻像上の特色についてみると、青面金剛像の相貌は、『陀羅尼集経』の「大青面金剛呪法」[8]に詳しく説かれているが仏教辞典では次のように要約されている。

曰く「一身四手、左辺上手に三股又、下手に棒を把り、右辺上手は掌に一輪をうけ、下手に羂索を把り、全身青色で三目があり、頂に髑髏を載き怒髪聳竪する云々」[9]。

しかし、庄内地方にかぎらず、この儀軌に沿ったものをみ

ることは減多にない。像のほとんどは他の地方と同様六臂である。（写真3参照）

ただ、庄内町奈良田の青面金剛像は破損がひどく、現在では尊像が下半身三分の一程度しか残っていないが、土地の人はこの像を「八つ手庚申」と呼んでおまつりしているところから、あるいは八臂の像であったのかも知れない。（写真7参照）



〔写真7〕八つ手庚申

庄内町奈良田にあり、造立年代は不明であるが塔基部に庚辰六月の陰刻がある。地元の人によって、この「八つ手庚申」を信仰すると、手が多い神様だけに農作業に能率が上がると信じられているのは典味深い。なお、青面金剛はその足下に邪鬼を踏んでいる。

また、儀軌には全く無関係であるが、どの像にも刻まれているものにショケラがある。

ショケラとは全裸の女人像で、青面金剛の左手によってその頭髪が握ぎられ、ぶら下げられており、妊婦の姿ともいわれる。（写真3参照）

しかし、このショケラについての意味は不明である。

また、天邪鬼に関しては「像の両脚の下にそれぞれ鬼を安んずる」（「像両脚下各安一鬼）」とされているが、わずかに前記庄内町奈良田の青面金剛像（写真7参照）と庄内町渕の庄屋跡の像とが各々一匹の邪鬼を踏みつけているのみである。[10]

以上、庄内地方の青面金剛像の相貌についての特徴を瞥見したわけであるが、これらの像の付帯物については後に述べ

る。

三、庄内地方に於ける造塔年代について

石塔の造立された年代が明示されているものは五体あり、文政五年（一八二二）を最初として全て文久三年（一八六三）までの間に造立されている。（別表Ⅱ参照）

別表Ⅱ

造塔年代	主尊
文政5（1822）	青面金剛像
嘉永6（1853）	青面金剛像
文久1（1861）	青面金剛像
文久3（1863）	青面金剛像
明治30？（1897？）	猿田彦大神

別表Ⅱに示された造塔年代の明らかなもの以外にも、幕末期に造立されたことを思わせる塔がいくつか存在する。

そのうちの一つは、庄内町八久保の青面金剛像二体で、古老の記憶によればその一つは天保の作と聞いており、他の一体は明治に造られたものであることはその記憶からほぼ確実である。

以上のことから、この地方の造塔のピークの一つは幕末にあったように思われるが、これだけの材料のみでこの地方の庚申信仰の受容と発展を判断することは不可能であることは勿論である。

なお、庄内町高岡の自然石塔は、「明〇卅年正月建立」と陰刻されていて一部判読困難なところがあるが、陰刻文字に「卅年」と読めるところがあることや、主尊や造塔様式などから、明治卅年に造立されたものとみなして差しつかえない、と考えられる。

また、庄内町袋の自然石塔群については、その造立年代は不明であるが、これらが全て六十一年毎に造立されたものと考えた場合、現存場所六か所で、都合三百六十年にわたっていることが推定される。

もっとも、最後に造立されたものの年代が確定されないか

ぎり、初期の造立がどのくらいさか上り得るかは判然としないが、少なくとも江戸中期よりさか上ることは推定できる。

しかし、この推測は今後充分に検討を要するものであり、今後の課題としたい。

四、青面金剛像の付帯物について

猿

鶏

日輪

月輪

天邪鬼

光背

青面金剛像の付帯物の組合せは多彩である。（別表Ⅲ参照）（写真8参照）

中でも猿と鶏は庚申塔を特色づける重要なものとされるが、庄内地方に於ても例外ではない。

調査した青面金剛像十二体のうち七体には猿と鶏が付されている。（写真8参照）

しかし、なぜこの塔に猿と鶏が付されているのか、ということについての定説はない。両者の位置については、そのほとんどが相対しているが、その左右はいずれもあって一定していない。

〔写真8〕

庄内町中渕庄屋跡。多くの付帯物があり豪華である。上部に日輪・月輪・頭部に光背を浮き彫りにし、猿、雄鶏もある。左手にはショケラをぶら下げている。全体がふくよかなモデリングで、温みを感じさせる傑作である。

猿の態様も三猿、二猿、一猿のものなど変化に富んでいる。

別表Ⅲ

	A	B	C	D	E	F
付帯物	猿（左）鶏（右）	猿（右）鶏（左）	三猿（右）鶏（左）	二猿（聞かざる（左）見ざる（右））鶏（左・右）天邪鬼	猿（右）雄鶏（左）月輪（左）日輪（右）光背	邪鬼
整理番号	4	5・12	7	10	11・13	15
数	1	2	1	1	2	1

庄内地方庚申塔一覧表

整理番号	主尊	所在地	刻銘・付帯物	備考
1	青面金剛像	大分郡庄内町畑田阿南神社境内	文久三年癸亥三月	板状船型
2	猿田彦大神	大分郡庄内町高岡	猿田彦大神　明〇卅年正月建立	自然石塔
3	自然石塔	大分市庄内町龍原袋	（自然石塔多数）	松庚申（二か所）杉庚申（一か所）
4	青面金剛像	大分郡庄内町龍原猿渡	一猿（左）　一鶏（右）	板状船型
5	青面金剛像	大分郡庄内町松の木（大龍神社参道右側）	一鶏（左）　一猿（右）	板状船型
6	自然石塔	大分郡庄内町大龍西鶴	（自然石塔三体）	庚申松
7	青面金剛像	大分郡庄内町八久保	嘉永六年癸丑十一月〇日　一鶏（左）三猿（右）	板状船型
8	青面金剛像	大分郡庄内町八久保	天保期の造立という。	破損著しく基部のみ
9	青面金剛像	大分郡庄内町八久保	明治に造立されたという。	破損著しく基部のみ

整理番号	主尊	所在地	刻銘・付帯物	備考
10	青面金剛像	大分郡庄内町中渕庄屋跡	文久元酉十月五日 きかざる（左）みざる（右）鶏（左・右）邪鬼	板状船型
11	青面金剛像	大分郡庄内町中渕庄屋跡	雄鶏（左）猿（右）月輪（左）日輪（右） 光背	板状船型
12	青面金剛像	大分郡庄内町渕一〇三四	鶏（左）猿（右）	板状船型
13	青面金剛像	大分郡庄内町中渕正徳寺境内	雄鶏（左）猿（右）月輪（左）日輪（右） 光背	板状船型
14	青面金剛像	大分郡庄内町中渕天満社	猿田彦大神	自然石塔
15	青面金剛像	大分郡庄内町奈良田	庚辰六月　邪鬼	尊像下部のみで損傷著し
16	青面金剛像	大分郡庄内町透内	文政五年天一月吉日	板状船型
17	自然石塔	大分郡庄内町大字阿蘇野字宮下		自然石塔

四月二日生）のお話によると、子供の頃、庚申塔には大きな松の木があり、その根元に自然石の石塔があった。

しかし、それを特に「庚申塔」とは呼んでいなかった。ただ、人々はその石塔を「歯の神様」と呼び、歯痛の時は萩（ハギ）の軸を折ってスダレのように編んで、石塔近くの木に下げておまいりした、という。

註(1) 柳田国男監修『民俗学辞典』一九六頁「庚申」

註(2) 拙稿「鶴崎地方の庚申信仰について」『大分県地方史（七八号）』三六頁

註(3) 調査地域を大字で示すと次の通りである。

畑田・長野・高岡・中・庄内原・平石・西・柿原・野畑・渕・大龍・五ヶ瀬・龍原・楽木・東長宝・西長宝・東大津留・南大津留・西大津留・北大津留・小挟間・阿蘇野

註(4) 猿田彦神については「古事記」に次のような記述がみえる。

「爾日子番能邇邇藝命、将天降之時、居天之八衢而、上光高天原、下光葦原中國之神、於是有。故爾天照大御神、高木神之命以、詔天宇受賣神、汝者雖有手弱女人、與伊牟迦布神自伊至布以音。面勝神。故、専汝往将問者、吾御子為天降之道、誰如此而居。故、問賜之時、答白、僕者國神、名猨田毘古神也。所以出居者、聞天神御子天降坐故、仕奉御前而、参向之侍。（傍線筆者）

『日本古典文学大系一』

「古事記祝詞」岩波書店刊行一二六頁

註(5) 庄内町大字阿蘇野字宮下の片伯部清氏（農業・明治三十八年

註(6) 平野実著『庚申信仰』角川書店　四〇頁

六十一年目の待上げを記念して造塔したことが知られるものとしては、大分市滝尾津守九組の大正七年造立の自然石塔がある。

この石塔には中心に主導の猿田彦大神の文字が陰刻され、その左側に「六拾壱年待上之塔」の文字が刻まれている。

この他にも次の石塔がある。（（　）内は造立年）

○大分市大字古国府龍ヶ鼻岩屋寺

奉待上庚申塔（宝暦十四年三月〇日）

奉待上庚申塔（己卯〔宝暦九年造立のものか？〕）

奉待上庚申塔（造立年代不明）

○大分市上野円寿寺境内

奉待上猿田彦大神安鎮（文政九正月廿六日）

註(7) 拙稿「鶴崎地方の庚申信仰について」
『大分県地方史（七八号）』三八頁

註(8) 同　前　四四頁

註(9) 『仏教辞典』聖典刊行会編集部
昭和七年版　「青面金剛」
青面金剛像の相貌が正式の儀軌から外れているものがほとんどであることは本文で述べた。「大青面金剛呪法」では「一身四手」と説かれている手が二手である例としては、大分郡野津原町船平の昭和十三年造立のものがある。大分地方では珍しい例として注目される。

註(10) 大分市玉沢の青面金剛は二匹の邪鬼をその足下に踏みつけている代表的なものである。

（[redacted]
・大分鶴崎高校教諭）